スルメイカ　*Todarodes pacificus*

県内一般にスルメと呼ぶほか、県西部では松イカとも呼びます。小型のものをムギワラと呼ぶこともあります。食用となる代表的なイカで、生鮮あるいは干物として広く流通します。

生物特性

スルメイカは日本近海に広く分布し、周年にわたり産卵しています。特に資源量として多い系群は、日本海側を回遊し、秋に日本海から東シナ海北部で産卵を行う、秋季発生群、そして、太平洋側を回遊し、冬の 1～3 月に東シナ海で産卵する冬季発生群です。本県を含む太平洋側における漁獲の主体は冬季発生群です。幼生は本州以南の暖水域に分布し、黒潮にのって北上回遊します。成熟が進むと産卵のために南下回遊します。寿命は 1 年で、雄は約 9 カ月、雌は約 10 カ月以降に成熟します。

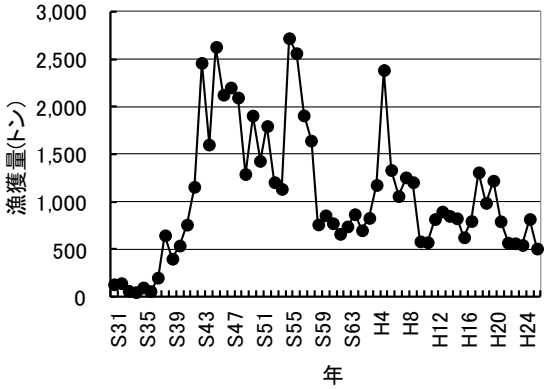

図 1　高知県下におけるスルメイカ漁獲量の推移.

資源動向

スルメイカ冬季発生群の資源量は平成元年（1989 年）以降増加し、高位～中位水準を維持していましたが、平成 26 年あたりから急激に減少し、平成 28 年度の資源評価では、水準は「低位」、動向は「減少」傾向にあるとされています。スルメイカの資源量は、マイワシと同じように海洋環境の変化によって左右され、海洋が寒冷な条件では、その成育が不適であるといわれています。海洋は今、寒冷な年代に移行している可能性があり、スルメイカの資源が減った要因かもしれません。

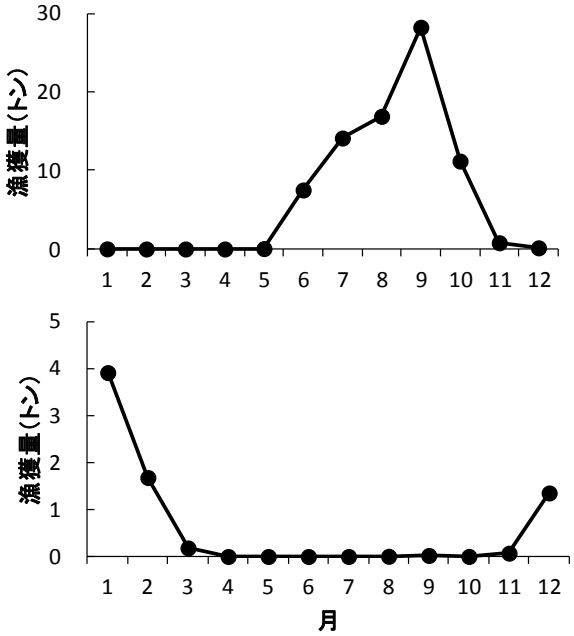

図 2　室戸岬西側の昼釣り（上段）と芸東沖の夜釣り（下段）のスルメイカ月別漁獲量。平成 18～27 年の平均値で示す.

県内の漁獲動向

高知県内における近年のスルメイカ漁獲量は、昭和 43 年（1968 年）以降は変動しつつしばらく高水準にありました（図 1)。昭和 58 年（1983 年）以降減少傾向となり、近年は500～800 トンの範囲で推移しています（平成 5 年（1993 年）を除く)。主な漁法は室戸岬周辺における一本釣りと、県内各地の定置網です。

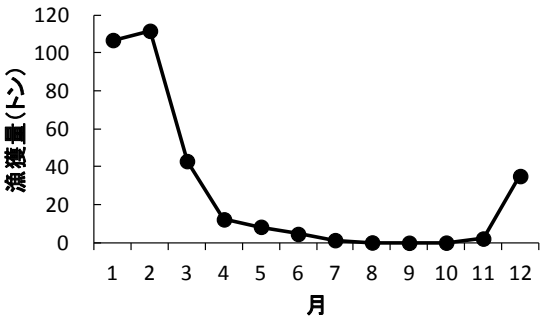

図 3　高知県漁業協同組合所属の大型定置網によるスルメイカ月別漁獲量。平成 21 年 4 月～平成 27 年 12 月の平均値で示す.

室戸岬の西側では、地方群対象の夏イカ漁が昼間の釣りとして行われます。また、室戸岬東側の芸東沿岸では、南下回遊する産卵群対象の冬イカ漁が夜釣りで行われます（図 2)。

定置網による盛漁期は産卵群が来遊する 12～翌年 3 月で、夏季にはほとんど漁獲されません（図 3)。